

□ 器楽（室内楽を含む）

渡 辺 和

2019年も、器楽室内楽の世界はコンクールでの日本人若手演奏家の活躍に沸いた。9月のミュンヘンARDチェロ部門で佐藤晴真が優勝。1963年の堤剛2位以来の日本人による最高位獲得である（2001年優勝の石坂団十郎はドイツ国籍）。11月にはロン＝ティボー国際コンクールのピアノ部門では三浦謙司が優勝、務川慧悟が2位に入る。6月のチャイコフスキー国際コンクールのピアノ部門でも藤田真央が2位となる。興味深いのは、これらが男性ピアニストばかりという事実だ。日本の音楽教育の「プロ志望は女性ばかり」という流れ（初夏の第7回仙台国際ヴァイオリン部門のファイナリスト日本人は女性のみ）や、「飛び抜けたソリストは韓国中国から」という状況（仙台国際ピアノ部門優勝は韓国のチェ・ヒョンロク）に変化の兆しがあるのだろうか。

コンクール上位入賞にキャリアとしての速効性が期待出来ない室内楽は、パンフやホルダーなど海外メジャー専門大会に参加した国内団体もなく、華々しいニュースに欠けた。だが、地味ながら極めて重要な展開があった。改元直前の4月末、実質的に初の全国規模プロ水準の弦楽四重奏専門大会として、秋吉台音楽コンクールが開催されたのである。国内であれ移動に費用がかかる弦楽四重奏とあってどれほど参加があるか不安視されたが、学部生から在京オケ団員を含む団体まで全国から10団体がエントリー。結果は、藝大大学院のホノQとサントリー室内楽アカデミーのQインテグラが1位を分け2位なし。3位もサントリー・アカデミーのチェルカトーレQが獲得し、葵トリオを生んだ同アカデミーの充実ぶりを示す。国内の高レベルな大会の存在がジャンル活性化に不可欠な事実を再確認させられた。

とはいえ世界の動きを眺めるに、才能発掘システムとしてのコンクールの見直し傾向に変わりはない。9月のパンフ大会は史上初の2団体優勝を出し、才能発見だけではなく育成の方針を明らかにする。専門大会として最も長い伝統を重ねる6月のホルダー大会は大改革を断行、運営側が世界から参加団体を選抜するやり方に変更した。国際コンクール連盟脱退を余儀なくされる変革で、未だに室内楽界では賛否両論が続いている。

日本でも、2020年に開催される第10回大阪国際室内楽コンクールに向け、主催の日本室内楽振興財団は、大阪フェニックスホールと横浜のサルビアホールに過去の優勝入賞団体を並べる連続演奏会を開催。参加者の成長も見守るイベントとして、旧来型コンクールの意義を可視化しようとした。仙台コンクールでは、ヴァイオリン部門審査委員長堀米ゆず子の強い意向で、セミファイナルにコンサートマスターの課題が与えられた。コンクールを改革する努力と評価すべきであろう。浜松ピアノ、神戸フルート、養父チェロ、豊中や金沢の左手ピアノなど、旧来型のコンクールが地域に根付いたイベントとして日本世界各地で盛んに開催される状況は続こうが、メジャー国際コンクールが大きく変貌する可能性が感じられた。

2019年の器楽室内楽界は、経済優先の文化政策がじわじわと浸透する推移の年でもあった。消費税引き上げや実質上の景気停滞にもかかわらず、旧来型の名演奏家による大中ホールでの単独公演は盛況。2月に続き10月にも来日したツイメルマン、3月のヒューイトやエマール、4月のクニャーゼフ、5月のアシュケナージ親子、6月のプレトニョフ、7月に単身来日し静岡AOIホールで唯一の独奏リサイタルを行ったアルディッティ、9月のプッフビンダー、カスタネットの名手ルセロ・テナと共演した10月のハーブのメストレ、11月のトリスターノやリフシツツなど、スターが日本を訪れている。

一方、若手や中堅奏者リサイタルや室内楽が700席以下の会場を選ぶ傾向はすっかり定着。ハーゲンQ（10月トッパン）やターチュQ（9月ヤマハ及びサルビア）、エベスQ（7月ハクジュ及びサントリー・ブルーローズ）などメジャー団体の首都圏公演はどれも400席以下の小ホールだったのは、主催者の負担を考えれば喜んでばかりもいられない。小規模ホールでは、門天ホール、トーキョーコンサート・ラボ、大阪のフェニックスホールなどの活動が目立される。適正規模で響きも立地も理想的な虎ノ門のJTアートホールの閉館が伝えられたのは、親会社の経営方針変化とはいえ残念ではある。

大ホールとは無縁になった演奏家や室内楽団体にとって、広く音楽ファンの目に触れる機会は、各地で開催される音楽祭である。複数会場で短期間に同時多発に演奏会を開催するフェスティバルは、3月の上野「東京・春・音楽祭」、5月の有楽町「ラ・フォル・ジュルネ・ジャポニ」、近江の春びわ湖クラシック音楽祭、「いしかわ・金沢風と緑の楽都音楽祭」、8月の御堂筋「大阪クラシック」、10月「仙台クラシックフェスティバル」、12月には那覇「沖映ストリートクラシックス」など各地に広がり、地域の若手中堅演奏家には貴重な演奏チャンスとなっている。金沢の音楽祭は、クレメルやボロディンQというスター演奏家を通常の独奏リサイタルでは不可能な安価で提供。イベント化を逆に、消費不況の中で理想的な環境で最高水準のクラシック音楽演奏に触れる機会を広げようとしている。

レパートリーと聴衆の拡大という意味で、札幌キタラ大ホールを満員にした9月のプラハ・チェロ・クアルテットを落とすわけにいくまい。若い4人のチェリストは所謂スター集団ではないが、YouTubeのビデオクリップが驚異的なアクセス数の大ヒット。ネットの口コミで室内楽とは無縁の「若い女性」にもアピールした。トークを挟みつつポピュラーやジャズ、クラシック編曲を次々と奏でるステージは、各地で満員札止めとなる。10月に初来日したヴィジョンQは、シューベルトなどを弾く前半と、同行する専属エンジニアがマイクで演奏を拾いスピーカーで流すポップス系の後半とを並べる。ファンからの拒絶反応が不安視されたが、結果として武蔵野市民会館と京都コンサートホールでの公演は大成功だった。ポップス型室内楽に二の足を踏んでいた日本の主催者としても、これらの成果に真剣に対応せねばなるまい。

2019年は、世紀転換頃から暗中模索を続けたパッケージ業界が、スターの作り方を本気で考え始めた年でもあった。かつてJクラシックでクロスオーバーの先鞭を付けたDENONが、若手独奏者専門のレーベルOpus1を立ち上げ、ヴィジュアルや露出の仕方でも含めトータルなプロモーションを展開。SNSを積極的に利用した広報など、室内楽のインディーズ化を前提にどうメジャーへと持ち上げるか、試行錯誤が始まったようだ。